

青年にとっての「地元」をめぐる研究枠組みの考察

—「標準的キャリア」概念に着目して—

丹田桂太[†]

[†] 東京大学大学院教育学研究科

本研究の目的は、青年層にとっての「地元」について言及してきた先行研究の議論を整理し、その議論のもつ枠組みを析出することである。1990年代半ば以降の「学校から仕事へ」という移行を中心にした「標準的キャリア」の変容は、青年層の労働・生活の様態を大きく変化させた。こうした状況の中、青年は自らの生まれ育った地である「地元」に残る／戻ることを志向している。先行研究は、彼らの「地元志向」や「地元」という場をもとに、従来の「標準的キャリア」に代わる新たなキャリア形成のあり方を検討してきた。しかしながら、その試みは困難なものとなるであろう。それは先行研究が「地元」という場を、「標準的キャリア」のもつ価値基準に基づいた「地方」や「ノンエリート」という概念を媒介に考察しているためである。「地元」を足場にしつつ新たなキャリア形成のあり方を考察するためには、これらの議論を構成する枠組みが問われなければならない。

キーワード：青年，地元，「標準的キャリア」，キャリア形成

目次	3.3.1 「ノンエリート」とは何か
	3.3.2 「下位文化」としての「地元つながり」
	3.3.3 「ノンエリート」青年の紡ぐ「地元ネットワーク」
	3.3.4 「なんとか過ごす」場としての「地元」と「ローカルネットワーク」
	3.3.5 「社会的排除」としての「地元志向」
1 研究の背景と目的	3.4 「ノンエリート」と「地元」とを重ねる議論の構造
2 「標準的キャリア」とは何か	4 議論のまとめと今後の展望
2.1 「標準的キャリア」としての「戦後日本型青年期」	4.1 本稿の知見
2.2 「地方から都市へ」の自明性	4.2 今後の展望：教育学研究のもつ「枠組み」へのアプローチの必要性
3 先行研究の議論とその構造	1 研究の背景と目的
3.1 「地方」と「地元」の関係	青年層のキャリア形成とこれをとりまく諸環境は、バブル経済崩壊後の1990年代半ば以降、急速に変化した。それは「学校から仕事へ」の移行の変容として示される、学卒後の若年世代にお
3.1.1 「ローカルな社会状況」を体現する場としての「地元」＝「地方」	
3.1.2 「地域の担い手」としての青年が生きる場としての「地元」＝「地方」	
3.1.3 戻り／残ることを可能にする場としての「地元」＝「地方」	
3.2 「地方」と「地元」とを重ねる議論の構造	
3.3 「ノンエリート」と「地元」の関係	

ける無業、不安定就労の増大として現れた。その背景には、日本独特の雇用慣行体制（日本型雇用体制）の瓦解があったとされるが、これはまた、青年層のキャリアの標準性のゆらぎ（「標準的キャリア」のゆらぎ）としても指摘されてきた。すなわち、「働く」ことを中心にした青年層のキャリア形成の困難が問題として浮上したのである。

このようなキャリア形成の困難化という状況下において、近年、青年層の「地元志向」という現象に注目が集まっている。ここで「地元志向」とは端的に、進学や就職に際し、生まれ育った地あるいはその近隣にとどまろうとすることや、他地域への移動後再び生まれ育った地あるいはその近隣に戻ろうとする志向性ということができる¹。例えば労働政策研究・研修機構による国立社会保障・人口問題研究所が実施した第7回人口移動調査の二次分析からは、進学移動、就職移動、進学・就職に伴う移動のいずれにおいても、若年世代が先行世代と比較して、自身の出身地にとどまったり、あるいは他地域への移動後に再び出身地に戻ったりする動きが多く生じていることが示されている²。また、質的研究においても、若年世代の「地元」という場、空間への愛着の存在が示されている³。

従来の「標準的キャリア」のあり方が大きく変容したとされる1990年代半ば以降、青年層の「地元志向」が増大しているとするすれば、それは、彼らのキャリア形成の標準性のゆらぎが、彼らの「生」そのものの不安定化を招き、さらにそれが進路選択を含めた人生の価値志向の変化を導いていると捉えられるであろう。このような視点に立てば、「地元志向」という現象および「地元」という場をいかに捉えるかという問いは、青年層のキャリア形成のあり方を展望していく上でも重要であるように思われる。

しかしながら、青年層の「地元志向」や「地元」という場について言及してきた先行研究は、これらに関連する議論を展開する自身の研究枠組みそのものを十分に検討してきたとは言い難い状況にある。したがって本稿では上記のような問題意識に基づきつつ、青年層にとっての「地元」という場やその機能について扱ってきた諸研究の議論の枠組みを析出することを目的とする。これは、「地元志向」および「地元」という場に根ざしながら、青年層のキャリア形成のあり方をより開かれたかたちで考察するための、いわば前段階

にあたる基礎的作業といえる。

2 「標準的キャリア」とは何か

2.1 「標準的キャリア」としての「戦後日本型青年期」

以上の目的に沿って本稿の議論を展開する前に、本章ではまず、1990年代半ば以前の青年のキャリア形成のあり方、すなわち「標準的キャリア」がどのようなものとして捉えられているかを確認したい。なぜならば、後に見るように、そうしたキャリアのある種の典型像の存在が、青年層の「地元志向」を扱う諸研究の前提として共有されていると考えられるためである。

1990年代半ば以前の日本においては、「学校から仕事へ」という移行形態が定着し、安定的に機能していたことによって、最終学校を卒業した者の大部分が安定的な雇用を得ていくという状況が存在していたとされる⁴。そこでは、「新規学卒一括採用」という「最終学校最終学年時に学校紹介を通して応募し、卒業時までには就職内定して、翌年四月一日一斉入社というパターンが「標準的」⁵であるとされ、青年は、この「標準的」なルートをたどることによって、「学校から仕事へ」の移行を遂げていたのである⁶。

しかし、このような移行の「標準的」なあり方は、生徒を送り出す学校とそれを受け入れる企業との間でのみ成立していたのではない。例えば乾彰夫は、日本独自の「青年期」のあり方を「戦後日本型青年期」と表現しているが、それを次のような特徴を持つものとして示している。

その期間の大部分は競争主義的な性格の強い学校へと吸収され、在学中はもっぱら家族と学校の保護と管理のもとにおかれるとともに、卒業と同時にその生活のほとんどが企業社会に包摂されるという形態であった⁷。

以上から、その特徴は次の三つの要素に分解できる。すなわち、その「青年期」は①競争主義的な性格の強い学校に吸収され、②在学中は学校と家庭によって保護・管理され、③卒業と同時に生活のほとんどが企業社会に包摂されるという3点である。

まず、第一の点について、「競争主義的な性格

の強い学校」とは、「偏差値」や「学力」などを基準とした能力によって生徒を一元的に序列化する構造のことをいう。企業での採用段階において重視されるのも、職種や学科を特定しない、このような基準に基づいた学業成績であった。

第二の点については、在学する間、子どもたちの生活費や学費は基本的に各家庭によって負担されるという特徴がある。また子どもたちは、校則をはじめとした学校的規律にもとづいて管理下におかれるが、そのような学校の規律が守られているかどうかは、基本的に家庭における「しつけ」がなされているかどうかということと連関して判断されるがゆえに、その欠如は「家庭教育」の失敗として捉えられるという特徴を有している⁸。

そして第三の点について、学校を卒業した生徒たちは「新規学卒一括採用」という慣行のもとで、先に見た学業成績を基準に企業へと採用され参入していく。これにより、彼らの保護と管理はもっぱら家庭から企業においておこなわれるようになる。企業は、労働力確保のために独身寮や社宅といった住環境を整備し、ここに学卒者たちを取り入れることによって、「就職」することが同時に親元を離れること（「離家」）をもたらし移行パターンを定着させた。そしてこのような移行パターンはのちに、就職のみならず進学移動によっても行われるようになる。こうして、就職にせよ進学にせよ、高校卒業時点で「離家」するという移行パターンが「標準的」になるのである⁹。「離家」することはまた、“自立に向かう象徴的なステップ”¹⁰として理解されるため、「青年期」の課題の一つである「大人へ」の移行をも達成したものとみなされる構造になっていた。

以上のように、学校と企業、そして家庭という三つの領域が相互にかつ緊密に結びつくことによって成立していたのが「戦後日本型青年期」であり、このような青年期を歩むことが、1990年代半ば以前の青年層における「標準的キャリア」であったといえることができる。

2.2 「地方から都市へ」の自明性

さらに、この「標準的キャリア」において重要なのが、「地方」から「都市」へという地域移動の自明性である。例えばそれは、本田由紀が戦後日本の社会モデルの一種として示している「戦後日本型循環モデル」に見ることができるであろう¹¹。

本田は「戦後日本型循環モデル」を、教育・仕事・家庭という三領域をつなぐ〈ヒト〉・〈カネ〉・〈ヨク〉の太い矢印の動きによって表現している。これは三次元の立体構造を取り、それらが螺旋状に、錐の頂点を目指すように働くように人々に意識されるという特徴を持っている¹²。人々はこのモデルのもとで「上昇志向」を有していたのである。

そして、この「上昇志向」の中には、二次元的・水平的な地域間移動が重ねられていた。つまり、“上昇移動のベクトルは東京を典型とする大都市に向かう形で成立”¹³しており、こうした“地方から進学や就職を通じて大都市に出てゆくという地理的な移動の軌跡”¹⁴が、このモデルの中には顕在化していたのである。これは、「戦後日本型青年期」の特徴としてあげた「離家」という行為とも重なるといえる。すなわち、このモデルにおいては、自らの生活を「よりよい」ものにしていくために生まれ育った「地元」を離れることが自明のものとして作用していたのである。このことはまた、「標準的キャリア」の文脈において、地方が大都市にとつての「周辺」として捉えられるとともに、労働力をはじめとした諸資源を、大都市によって搾取される構造によって位置づけられていたということの意味している。

以上を踏まえれば、「標準的キャリア」の文脈における「地元」とはそのままだ「地方」を意味するものであり、このことにおいて「地元」に残ることは、キャリアの標準像から外れる事象として理解されるものであったといえる。

3 先行研究の議論とその構造

3.1 「地方」と「地元」の関係

ここまで、1990年代半ば以降変容したとされてきた青年層の「標準的キャリア」と、そこにおける「地方から都市へ」という地域移動の自明性の存在を確認してきた。以下では、青年層の「地元志向」を扱う先行研究の議論に基づきながら、そこで「地元志向」や「地元」という場がどのように捉えられているかを整理していく。その際、整理のポイントとして以下の諸点に注目する。すなわち、①問題関心、②「地元志向」や「地元」の用いられ方、③議論の知見と展望という3点である¹⁵。

3.1.1 「ローカルな社会状況」を体現する場としての「地元」＝「地方」

尾川満宏「地方の若者による労働世界の再構築—ローカルな社会状況の変容と労働経験の相互連関」(2011)は、地方部に住む青年への参与観察と非構造化インタビューをもとに、彼らを取りまくローカルな社会状況と労働経験との相互作用を考察することを通して、彼らが「地元」での建設業に従事する中で形成した「職人」としてのアイデンティティを、転職後の工場労働の世界において用い、語ることによって異化＝再構築する様子を描き出している。尾川は、冒頭の「問題の所在」において、研究の背景を次のように捉えている。

教育社会学における「学校から職業への移行」に関する研究(以下、移行研究)も、1990年代後半以降、高卒「フリーター」「無業者」研究として蓄積されてきた。特に2000年代半ば以降は、不安定な若年層を生み出す現代の社会経済構造を問題とする見方が広まった。このことにより、日本の若者をグローバルな社会変容の文脈でとらえる必要性が強調されることとなった¹⁶。

しかしながら、フリーターや無業者といった大都市に顕著な問題が注目を集める一方、地方における若者の移行経験はこれまでほとんど看過されてきた。キャリア教育をめぐる近年の議論も、グローバル経済にともなう大都市部の若者の困難を足場にその地平を形成してきた。それゆえ、地方におけるローカルな社会変容が及ぼす若者たちへの影響を扱った研究は、ほとんど蓄積されていない¹⁷。

このように尾川は、グローバルな社会経済的変化と1990年代半ば以降の「学校から職業への移行」の不安定化を問題の端緒に置きながら、これに注目してきた先行研究が、大都市部の若年層の問題を一定程度明らかにしつつも、一方でそうした状況下における「地方」の若年層の動きを見逃してきたことを問題視している。そしてそうであるがゆえに、“看過されてきた地方の若者たちによる労働経験をローカルな社会状況とともに解釈することは、地方の現在からキャリア教育や移行研究の枠組みを問い直すうえで、きわめて重要な

作業”¹⁸として位置づけられるのである。

ここで注目したいのは、そこでの「地元」の捉えられ方である。尾川の議論において「地元」は以下のような文脈で用いられる。

従来、調査協力者の「地元」における男性労働は建設業・製造業を中心とし、なかでも建設業は職人世界を形成してきた¹⁹。

ここで「地元」は、建設業・製造業といった“伝統的な労働形態”²⁰を付帯し、“県庁所在地から離れた過疎化の進行が顕著な地域であり、労働力が流出しやすく求人量も豊富とはいいがたい”²¹「地方」と混同されながら示されている。すなわち、尾川の議論において「地元」とは、「ローカルな社会状況」を体現する場としての「地方」と同義なのである。重要なのは、その「地元」が暗黙裡に「地方」としての”という意味を含みこむかたちで用いられている点にある。

尾川はその議論のまとめとして、教育社会学における社会階層の再生産論を引きながら、調査対象地域が“大卒労働市場の規模はごく小さく、若者たちの親の学歴水準は都市部のそれを下回る”がゆえに、“高等教育機関の極端に少ない「地元」にとどまる若者は、大学進学のために流出する「地方エリート」を見送り、無業でなくても親と同様「地方ノンエリート」としての生を引き受ける”ことを指摘²²しつつも、一方で、これを脱「問題化」することを試みる。

そうした構造によって若年労働力が供給され、地域の労働力需要が充足され、かたちを変えながら職人世界の規範や文化が存続する現実が地方にはある。特定の働き方とキャリアを強いるローカルな社会状況を所与のものとするならば、再生産を脱「問題化」し、若者が「地元」を豊かに力強く生きてゆくための議論が求められる²³。

つまり尾川は、グローバルな社会状況のもとで一層深刻化する都市—地方間格差の存在を認めながらも、一方で「地方」に存在する伝統的な社会構造とのもとでキャリアを形成している青年たちの実態を生かしながら、これを「地元」という語を用いて脱「問題化」することを試みているのである。ここで尾川が再生産を脱「問題化」する

のは、「地方」＝「地元」において青年が生きていくことを可能にするようなキャリアのあり方を展望しているためであるといえる。

3.1.2 「地域の担い手」としての青年が生きる場としての「地元」＝「地方」

尾川と同様、青年の移行過程に関する議論における「地方」への視点の欠落を問題視し、そうした地域で生活する青年の実態に注目する必要性を提起するのが、窪田玲奈である。窪田は「地方都市における若年層の移行（transition）研究に関する考察枠組みの再検討」（2013）において、青年層の移行過程を扱う先行研究が、“地元から「出ない」（残る・戻る）＝「出ることができなかった」という解釈となり、「なぜ移動しないのか？」、「移動することができない理由は何か？」という問いの立て方をする傾向にある”²⁴ことを批判し、“（地方－都市）における地域間格差，その下での若年層の移行を、「地域」という変数から捉えるのではなく、「地域の担い手」としての「地方ノン・エリート」の実態，生の諸相から何を見出すのかという観点から考察を試みる”²⁵必要性を提起している。このような議論を志向する窪田は、その冒頭において、研究の背景を次のように捉えている。

近年、全国の若者の学校から仕事・職場への移行の困難に焦点を当てた研究が増えている。…（中略）…圧倒的な地域間格差の下、進路選択期において、地元に残りたくても残れない／戻りたくても戻れない、過疎化の進む縁辺化地域が日本には数多く存在する。…（中略）…特に、過疎化の進む地域において、多くの者が地元から流出する中、地元に残って生活する若年層に焦点化した研究は少ないと言える²⁶。

窪田は、尾川と同様、「学校から仕事へ」の移行の不安定化を問題としてまず取り上げ、その変容の中で同時並行的に進展しつつある都市－地方の地域間格差に注目している。そして、そのような格差が現出する「地方」の「地元」に残る青年の存在に目を向ける必要性を提唱しているのである。ここにおいて「地元」という場は、「地方」の問題と重ねられることで展開されていくことになる。

窪田は議論の知見として、働くことを中心にし

ながら「地元」に根づく青年の「地元つながり」を、「日常の普通の生活」の中であつられつあつるものとして導き出している。また同時にそれが高校の同級生を核としながらも、対象地域の中に閉じこもることなく、「内／外」「都市／田舎」という二項対立的な関係を越える生活の中で形成されていることを指摘する。すなわち、窪田もまた都市－地方間に存在する格差を問題視しつつ、そのような格差が深刻化する「地方」における青年の実態から「地元」という場の持つ意味とそこで紡がれる「地元つながり」の存在を見出すことによって、先に示した「なぜ移動しないのか？」、「移動することができない理由は何か？」という従来の移行研究の視点を捉え返すことを試みているといえる。こうした知見を踏まえ、窪田は最後に次のような問いを示す。

進路選択において「地元に残る・戻る」とことは避けるべき選択肢なのだろうか。むしろ、「地元に残る・戻る」という選択肢に展望を持つことができるようにするために、何ができるかを考えるべき時代なのではないか²⁷。

ここには明確に、従来の「標準的キャリア」のあり方を乗り越えようとする意識が見受けられる。つまり窪田は、「都市／地方」の地域間格差という社会経済的状況を背景に置きながら、この中で従来「なぜ出ることができないのか」「その理由は何か」というかたちで問題化されてきた「地方」でのキャリア形成を、「地元」でのキャリア形成として捉えることによって、一つのあり得べき選択肢を展望しようとしているのである。

3.1.3 戻る／残ることを可能にする場としての「地元」＝「地方」

また山口恵子「『東京』に出ざるをえない若者たち：地方の若者にとっての地元という空間」（2014）は、現代社会における「若者」の問題化以降、フリーターやニートに焦点を当てた調査・研究が進められてきたものの、その対象の多くが大都市部の若者たちであり、地方の若年者の労働・生活の様態が十分に焦点化されていないという問題意識から、青森県の若年者を事例とし、その労働移動と地元機能について検討を行っている²⁸。ここでは、3人の若年者の事例から、青森県を離

れ都市（東京）に出て働きながらも、その労働環境の劣悪さや雇用の流動性ゆえに、最終的に「地元」である青森へと帰っていく様子が詳細に描かれている。山口によれば、彼らがこのような不安定な生活を強いられつつも、そこで「なんとかやってゆく」ことを可能にしているのが、「地元」にある「実家」（家屋などの資産と親・きょうだい・親族等の人間関係）とそのまわりの友人たちであり、このような「資源」が地方の若者が「地元」に戻ることを可能にしているのだという²⁹。ここで「地元」は、あくまで上記のような“不安定さへの防波堤である地元という空間”³⁰として表現され、親が亡くなったり、世代が変化したりすることによって脆弱なものになりつつある場として位置づけられるのである。

このような山口の「地元」理解は、「都市」に対する場としての「地方」における問題とともに「地元」の機能的側面が論じられることによって成立している。この点で、尾川や窪田の議論と同様、「地方」と「地元」とが重ねられているといえるだろう。すなわち、「地方」出身の青年の労働と生活の不安定さを幾分かでも緩和するものとして機能するのが「地元」という場であり、またそこに存在する物的・人的資源というわけである。

3.2 「地方」と「地元」とを重ねる議論の構造

ここまで見てきた先行研究の議論から、次のような特徴が導き出される。第一に、いずれも従来の青年層の移行研究における「地方」への視点の欠落を問題視していることである。第二に、そのような「地方」に暮らす青年の実態にアプローチすることを試みていることである。第三に、その過程で「地元」という場やそこにおける様々な「資源」の存在が見出されていることである。また、第四に、そこで見出された「地元」を用いることによって、これまで看過されてきた「地方」の青年に光を当てるとともに、従来の「都市－地方」という二項対立で捉えられてきた移行研究に一石を投じることを試みていることである。

これらのことによって先行研究は、従来の「標準的キャリア」を乗り越えることを試みていると言えるが、同時に次のような枠組みを有することによって、その試みは隘路を抱えることになる。すなわちそれは、「地方」としての「地元」において対象化される青年を「ノンエリート」として位置づける枠組みである。尾川や窪田の論稿にお

いて、「地元」にとどまる青年は、大学進学する「地方エリート」を見送る「地方ノン（・）エリート」として表されている。彼らが「ノンエリート」である所以は、彼らの生きる「地元」が、“残りたくても残れない／戻りたくても戻れない、過疎化の進む縁辺化地域”³¹であり、“「東京」というグローバル・シティ”³²に対置するものとしての「地方」と同値されながら論じられる、まさにこの点にあるといえるだろう。そしてそれゆえに、彼らの生きる「地元」はそれ自体変わることのない静的なものとして位置づけられる、言い換えれば「地元」という場が所与のものとして議論の中に位置づけられることになるのである。

「地元」が所与性を帯びながら論じられることは、何を意味するであろうか。それは他でもなく、「地元」という場において青年がキャリアを形成していくという道筋を限定的なものにしてしまうということではないだろうか。

3.3 「ノンエリート」と「地元」の関係

以上のように、都市－地方間の格差が進展する中で見過ごされてきた「地方」の青年層に目を向けてきた先行研究は、「地方」を青年層にとつての「地元」と位置づけることによって、従来の「都市－地方」という二項対立的構図を乗り越えつつ、そのような「地方」＝「地元」においてキャリアを形成していくことを可能にする視座の必要性を主張していた。このような文脈において対象化されるのは「地元」に残りあるいはとどまる青年なのであるが、前節で見たように、彼らは「地方ノン（・）エリート」として表現されている。つまり、今日展開されている「地元」をめぐる先行研究において、青年は「ノンエリート」青年として対象化されているのである。それでは、その「ノンエリート」とは何を意味するのだろうか。

3.3.1 「ノンエリート」とは何か

「ノンエリート」青年という概念について検討を行っている高山智樹は、これを次のように示す。

新規一括採用システムによる正規雇用での就職、そして男性の場合は長期雇用による初職の継続と年功序列による昇進を前提とした世帯形成、一方女性の場合は結婚退職をある程度まで前提とした就職と（上述のような男

性との) 世帯形成後の専業主婦化ないしは必要に応じたパート勤め,そして年金および子どもからの援助による退職後の生活,という「典型的」で「平均的」とされる「日本型雇用」を基盤にしたライフコースを展望できない人々を「層」として把握することを目指すものである³³。

加えて高山はその脚注において、「エリート」という言葉そのものが「選抜された」という意味を含んでいることを鑑み,“さしあたり,公教育も含めた学校教育制度がもつ選抜機能,また学校経由の就職の際に行われる選抜や就職の際の選抜,そして就職後にさまざまな形態で行われる選抜競争においてしばしば排除・離脱の経験をもつという意味で「ノン」エリート”³⁴であると,この概念を定義する。

高山が「ノンエリート」をこのように定義するのは,これまでの多くの「若者論」の問題構成が,“企業主義秩序の崩壊に伴う「標準的ライフスタイル」の解体によって,若者の移行全般が不安定化・断片化し,それまでは「スムーズ」で「安定」していた「青年期」が,突如として「不安定」で「困難」なものになったという筋立てになっている”³⁵ことを批判的に捉えるためである。高山はここに,階層的な視点を導入する必要性を指摘する。つまり,「ノンエリート」という概念は,従来の「若者論」のように「若者」一般を論じることを避け,より深刻な影響を被る下層の青年に目を向けることを志向しながらも,その“下層内部での分化を超えて何らかの連続性ないしは連関性”の存在を見出そうとするものなのである。ここには,「若者」一般として論じられることによって不可視化されてきた「下層の若者」を,議論の俎上に載せようとする意図もある。

以上のような把握から示される「ノンエリート」青年を,高山は“仮に「標準的」なライフコースをモデルと見なしていたとしても,そのモデルから自身の現実のライフコースが外れてしまうという事実と向き合い,結果として支配的なものとは異なる「成長」のあり方,独自のライフコースを自ら展望・形成していかざるをえない”³⁶存在として位置づける。ここに,「ノンエリート」青年の主体性と自立性の余地が見出されることになるのである。

以下では,このような「ノンエリート」青年を

対象化しつつ,これと「地元」との関係論を論じる先行研究を概観する。ここでもまた,前章と同様,①問題関心,②「地元志向」や「地元」の用いられ方,③議論の知見と展望という3点に注目しながら,両者の関係を整理する。

3.3.2 「下位文化」としての「地元つながり」

新谷周平「ストリートダンスからフリーターへ—進路選択のプロセスと下位文化の影響力—」(2002)の議論は,「地元」という場所における人間関係のあり方を先駆的に見出すものであった。新谷は,当該論稿の冒頭において,研究の背景を示しつつ,これに対する先行研究のアプローチ次のように批判する。

「高卒無業者」「フリーター」は,90年代を通して増加傾向にある。それに対して先行研究は,進路選択と学業達成,出身階層,学校外文化との相関を示すことを通して,それまでスムーズに行われてきたと言われる学校から職業への移行システムの揺らぎを示し,「階層分化,再生産問題」「就職支援問題」「学校教育の正当性問題」としてこの現象を捉えている。…(中略)…しかしこれらの研究は,提起された政策的対応は有効かという問いに答えることはできないであろう。なぜならば,個人の進路選択プロセスおよびそれに対する下位文化の影響力に光を当ててこなかったからだ³⁷。

ここからはまず,新谷の関心がやはり1990年代半ば以降の「学校から仕事へ」という移行形態の変化にあることがうかがえる。さらに,「個人の進路選択プロセス」や,それまで看過されてきた「下位文化」の影響力に注目する必要性を提唱していることから,より開かれたかたちでの進路選択,すなわちキャリア形成のあり方が志向されていると考えることができるだろう。

新谷は以降で,ストリートダンスグループへの参与観察から,グループに参加する青年たちが学校や家庭とは異なる「場」とともに,「時間」や「金銭」を共有しながら,職業的達成よりも「地元」という場所で生きていくことを重視している様子を描いている。そして,このような特徴をもった下位文化を,新谷は「地元つながり文化」と名づ

けるのである。新谷の研究の知見としてとりわけ重要なのは、こうした青年たちが「地元」という場において形成している独自のネットワークとして「地元つながり」を見出し、彼らにとってはその関係を維持することの方が重要と考えられているがゆえに、「フリーター」という働き方が適切なものとして位置づけられていることを明らかにした点にある。つまり新谷の議論においては、「地元」という、かつてはそこにとどまることが「非合理的」とされてきた場所が、青年たちの「下位文化」としての「地元つながり」を媒介とすることによって意味を持ちはじめるのである。

新谷は最後に、上記の知見を踏まえた上で、冒頭に掲げた政策的対応への示唆について言及しながら、次のように述べる。

そのように考えると、「進学」「就職」という選択もすべての人にとって同様に価値あるものとはならず、その人の置かれた状況によって異なるということになる。ある者にとっては、「進学」よりも明らかに他の資源が重要になるのである³⁸。

すなわち、従来、社会移動の階層間平等という観念に基づいて行われてきた様々な政策的対応が、一方で“個人の上昇移動＝地域移動を前提とするため、それとは適合しない文化に属する者に対して利益をもたらさない可能性”³⁹を持つことを指摘し、その妥当性への疑義を提示するとともに、必ずしも上記のような観念を前提としないキャリア形成のあり方へと議論の地平を開いているといえる。

3.3.3 「ノンエリート」青年の紡ぐ「地元ネットワーク」

同様に、青年のそのような地元での人間関係に注目する研究として、東京都立大学・首都大学東京の研究グループによる、東京都公立高校普通科卒業生への7年にわたる追跡調査がある。ここには、調査が開始された2002年当時のマスメディアを中心とした「若者バッシング」とそこで描かれる若者像への違和感、および移行過程が不安定化するなかで高校を卒業する若年者の「その後」の移行プロセスの全体像を把握する必要があるという問題関心がある⁴⁰。

この調査で対象とされたのは、多摩地区にある入学難易度中位のA高校と、下町にある学区内でも最も入学難易度が低いとされるB高校であった。そして、この7年にわたる追跡調査の結果と知見は一つの書にまとめられているが、このうち、高校卒業後の若者たちが形成する「友人ネットワーク」に注目し、その中でもとりわけ「地元」において形成されるそれ、すなわち「地元ネットワーク」について言及しているのが、藤井（南出）「ネットワーク形成・維持の基盤」（2013）である。藤井（南出）は、調査対象者の中でもとりわけ困難な状況に置かれているB高校卒業の女性に注目し、彼女たちが学校や正規雇用といった安定的な所属から外れたのちの不安定な生活の中で、自らの生活と彼女たち自身の存在を支えている「友人」たちの存在の大きさを指摘している。ここで彼女たちは、「安定的な所属から外れている」ことによって対象化されるという点において、先の高山の定義に似た「ノンエリート」と重なるといえるであろう。

藤井（南出）は、彼女たちとその友人たちが生活する「地元」を基盤に成立・維持されている「友人ネットワーク」を、「地元ネットワーク」と名づける。ここで「地元ネットワーク」とは、“B高校出身の女性たちがつくっているものであり、趣味などを介してつながっている友人グループ（〇〇つながり）が、高校時代のさまざまな関係を介して重なりあい、生活圏である「地元」をベースとして層状に広がっているネットワークの束”⁴¹と説明される⁴²。この「地元ネットワーク」は、先の新谷らの研究における「地元つながり」と比較してもその「潜在性」に特徴があるといえる。すなわちそれは、常に同様の友人グループとして密接に結びつき合っているわけではないけれども、“見知った人たちが生活する地理空間としての安心感（「地元」感覚）を提供しながら、何らかの契機によって明示的な資源として（再）浮上してくる”⁴³ものなのである。つまり、藤井（南出）の議論において「地元」は、高校卒業後、安定的なキャリアを歩むことができていない「ノンエリート」青年同士を支える「場」とあると同時に、上述のネットワーク形成を可能にする「資源」として位置づけられているといえる。「地元」に「資源」という側面を見出す視点は、先の山口の議論とも重なっている。

3.3.4 「なんとか過ごす」場としての「地元」と「ローカルネットワーク」

また杉田真衣『高卒女性の12年 不安定な労働、ゆるやかなつながり』(2015)は、先の乾らによる経年調査を引き継ぎながら、南出(藤井)が指摘した「地元ネットワーク」と近縁の概念として、B高校出身の女性たちがその生活の中で紡ぐ「ローカルネットワーク」に注目している⁴⁴。杉田はまず、同書の冒頭において、議論の前提となる社会認識を次のように整理している。

第一に、〈学校から仕事へ〉の移行が不安定化した。…(中略)…。第二に、若者たちが依拠できる社会関係資本が収縮しつつある。…(中略)…。第三に、若者のライフコースが二極化し、とりわけノンエリート層の生活の底が抜けている⁴⁵。

つまりここでも、新谷や藤井(南出)の関心と同様、従来の移行形態の変容が問題の端緒と位置づけられつつ、加えて、彼ら(彼女ら)の「ネットワーク」のあり様と、そのうち「ノンエリート」層における生活の困難化に大きな課題を見出しているといえる。

杉田は同書において、「ノンエリート」である彼女たちそれぞれの居住地が比較的近く、また彼女たち自身も何らかの契機にその「地元」から離れようとはしなかったという「地域性」に注目し、「地元」というローカルな空間に彼女たちが埋め込まれていたということが関係性を維持する重要な役割を果たしていたと指摘する⁴⁶。そしてそのことによって、つまり「ローカルネットワーク」というゆるやかなつながりを形成することによって、「標準的キャリア」を歩むことができなくても、その不安定な生活を支えることが可能になっていることを明らかにしているのである⁴⁷。「ローカルネットワーク」は、「ノンエリート」である彼女たちが「地元」という場に自らを位置づけつつ、そこで形成した人的ネットワークを基盤にしながら、日々を「なんとか過ごす」ことを可能にする。このような杉田の「地元」の捉え方は、先の藤井(南出)の議論における地元理解と大きく重なっているといえるであろう。

同書において対象となった「ノンエリート」の女性たちを「航海者」と捉えながら、杉田は次の

ような展望を示す。

彼女たち一人一人のその「航海」において、友人の船はすぐに横で伴走していることもあれば、遠くまで離れていくこともある。…(中略)…彼女たちは、大人のコミュニティにも支えられながら、自分たちなりの〈社会〉をつくりだそうとしている⁴⁸。

もちろん、彼女たちの〈社会〉はいまだおぼろげなこともあって、自分たちが〈社会〉をつくりだしつつあることに彼女たち自身が十分に自覚的であるとは言えない。しかし…(中略)…そこに私は、彼女たちが自ら「航海」を続ける海域のことを「私たちの海」と認識するようになる可能性を見出したいのである⁴⁹。

つまり杉田は、「ノンエリート」の女性たちが不安定な労働環境・家庭環境におかれていることそのものは問題視しながらも、そのような環境にある彼女たちが「地元」という場におけるコミュニティとしての「ローカルネットワーク」に比較的安定的に位置づきつつ、かつそれを維持しながら生活している様子に、彼女たち自身の手によって〈社会〉を構想していく可能性を展望しているのである。それはまた、従来の「標準的キャリア」に代わるオルタナティブなキャリアのあり方を「地元」という場をベースにしながら展望するものであるともいえるであろう。

3.3.5 「社会的排除」としての「地元志向」

本節の最後に、青年層の「地元志向」の様態について社会学的観点から検討している研究にも触れておきたい。そこには、前項までに扱ってきた先行研究のアプローチの仕方との違いが見られつつも、一方で「地元志向」を有する者としての青年の把握の仕方に共通性を見出すことができる。

このような観点を有する代表的な研究としては、轡田竜蔵による「地元志向」の類型化の試みあげられるであろう。轡田はその議論を次のような一節ではじめる。

地方圏の若者の労働環境が悪化している

にもかかわらず、若者の地元志向傾向が強まっていると言われる⁵⁰。

このように轡田は、「地方」圏の労働環境悪化という事象を「問題」と置くことによって、「地元志向」という動きを考察する一つの根拠としているのである。轡田はこの論稿を通して、そうした状況においてもなお「地元」を目指す青年層の志向性に対する肯定的／否定的な評価を概観したうえで、「地方圏在住の「地元志向」の若者当事者のリアリティを分析すること」⁵¹によって、「地元志向」という現象を評価する議論に介入することを試みている。このような問題意識そのものは、看過されてきた「地方」の青年に目を向ける必要性を指摘した尾川や窪田の問題意識とも重なる。

轡田はまず、「地元志向」を「経済的戦略」と「存在論的戦略」という二つを軸にしなが、以下の四つに分類している。すなわち、①「経済的戦略」も「存在論的戦略」も強い「安定的な職業による包摂」、②「経済的戦略」は弱い「存在論的戦略」は強い「地元つながりによる包摂」、③「経済的戦略」は強い「存在論的戦略」は弱い「地元の消費生活環境による包摂」、④「経済的戦略」も「存在論的戦略」も弱い「社会的排除の結果としての地元滞留」である。中でも轡田が注目するのは、第四のタイプ、つまり、経済的戦略も存在論的戦略も弱いゆえに、社会的排除を受けている層である。この第四のタイプに属する層について、轡田は次のように述べる。

それは、積極的に地元に残ろうとしたというよりも、むしろ社会的排除の結果として、やむを得ず「とりあえず地元にいる」あるいは、「地元に戻らざるをえない」という不遇な状況にある若者である。厳しい社会経済の状況を目の前にして、実家というセーフティネットに頼らざるを得ないという状況である⁵²。

このような層を、轡田は明確に「ノンエリート」の地元志向の若者」として位置づける⁵³。つまり、上記のように「地元志向」のあり様を分類することによって、それが必ずしもネガティブな行為として捉えられるものばかりではないことを指摘しつつ、一方でこの文脈において問題化されるの

は、「決して明るくない自分の将来展望を語りながら、それでも「地元生活」がもたらすささやかな包摂の感覚によって、ぎりぎりのところで自らの存在を支えている」⁵⁴存在としての「ノンエリート」なのである。

轡田は、自身が行った調査の結果と分析を踏まえ、とりわけ労働力市場から「排除」される傾向にある「ノンエリート」青年たちにとっては、「排除」に“柔軟に対応できるようにするために、「精神的な“溜め””を作るという観点”⁵⁵が必要ではないかと提起する。その具体的策として示されるのが、「ネットワーク」なのである。

地域に暮らす多様な立場や価値観の人々とのネットワーキングを進め、自分が生きていく地域社会についての正確なイメージを持つことができるように、知識を身につけることである⁵⁶。

ここまで見てきた先行研究と同様、轡田もまた「地元」という場における問題を、「ノンエリート」青年を対象化することによって論じつつ、一方でまたそうした「地元」において「ノンエリート」青年が生きていくための道筋を模索しているといえる。このような視点もまた、従来の「標準的キャリア」を乗り越える議論のひとつとしてみることが可能であろう。

3.4 「ノンエリート」と「地元」とを重ねる議論の構造

以上の先行研究からは、次のような共通点が導かれる。第一に、「地元」と「地方」とを重ねる議論と同様、1990年代半ば以降の青年層の移行過程の変化に、その問題意識の基底をおいていること。第二に、現在の社会状況の中で相対的に不利な状況に陥る傾向にある青年の問題を焦点化しようとしていること。第三に、そうした不利な状況が、「標準的キャリア」に十全にのることのできなかつた「ノンエリート」青年に生じていると捉えられ対象化されていること。第四に、そうした「ノンエリート」青年の紡ぐ「ネットワーク」に関心が寄せられていること。そして第五に、そのような「ネットワーク」を基にしなが、従来の「標準的キャリア」に代わる、「ノンエリート」青年の「地元」でのキャリアのあり方を構想しようとしていることである。

つまり、いずれの議論においても、そこで取りあげられる青年は、(各議論において必ずしも主題化され明示されているわけではないが) 学力偏差値的に規定された「学校」との関わりでその存在が規定され、学卒後、必ずしも安定的な就業状況にあるわけではない「ノンエリート」青年として対象化されている。そして、そのような青年たちが生きている「リアリティ」の中に「地元」という場とその機能が発見されるのである。

以上のように「ノンエリート」と「地元」とを重ねる議論を整理したうえで、改めて「ノンエリート」概念に立ち戻って考えると、先行研究において「地元」に位置づく「ノンエリート」青年もまた、高山が示唆しているように、「地元」という場において「ネットワーク」を形成し駆使しながら、独自のライフコースを自ら展望・形成していく存在として捉えられることになるだろう。しかしながらそれは、先行研究の議論が意図しているように、必ずしも従来の「標準的キャリア」を越えるものとしては展開し得ない。なぜなら、高山の「ノンエリート」概念に従って「ノンエリート」青年が対象化されるとするならば、それは常に「標準的キャリア」との対比の中でしか存在し得ず、したがって彼らが「ノンエリート」として捉えられる限り、彼らの形成するライフコースもまた「標準的キャリア」という支配的なものとの対比の中でしか理解されえないためである。敷衍すれば、それは青年層にとっての「地元」をめぐる先行研究の持つ枠組みに、「標準的キャリア」の価値基準が今なお残存していることを意味する。本節では主に、「地元」において紡がれる「ネットワーク」の機能について論じた先行研究を見てきたが、ここに「標準的キャリア」の価値基準を含みながら議論が展開されることは、次の議論に見られるように、「地元」という場を容易に批判的なものとして理解する道筋を生み出すことになる。

例えば御旅屋達は、「居場所」論の観点から近年の「地元志向」に注目しているが、ここで「地元」に残るのは、2000年代後半の景気回復後、雇用状況の芳しくない都道府県において若年層の県外流出が高まっていることを背景とすれば、“実は地元に取り残された若者である”⁵⁷と指摘する。「取り残された」という表現に示唆されるように、ここには「地元」にとどまる青年を「ノンエリート」として捉える視点と通じるものがあるといえる。さらに御旅屋は続けて、このような状況において

もなお地元に残るには、「地元」に「いる」ための意味を見いだすことが求められる”⁵⁸と述べ、それを下支えしているのが“地元における人間関係である”⁵⁹と、いわゆる社会関係資本や「居場所」へと論を展開する。「地元」における人間関係は、親密性と閉鎖性の強い「強い紐帯」(M. Granovetter)であり、そうであるがゆえに“そこに住む者の生活を丸抱えし、その中で生活を完結させる”⁶⁰ものとして作用する。つまり、御旅屋の議論において“地元で生きるということは、濃い関係性にゾッポリとはまって生きることを意味”し、“それはまさに不安定な場に「ずっと続ける」ことであり、地元「居場所がある」ことは、そのネットワーク内にとどまることを可能にする。そして同時にそれは「強い紐帯」として、彼／彼女らを地元という「居場所」に縛りつける”⁶¹ものとして捉えられることになるのである。「地元」という場と、そこで紡がれる「ネットワーク」がこのように固着的なものとして理解されるのは、その議論のうちに、先に見た「標準的キャリア」の文脈における「地方から都市へ」という移動の自明性が前提化されているためなのではないだろうか。

4 議論のまとめと今後の展望

4.1 本稿の知見

ここまで見てきたように、青年層にとっての「地元」をめぐる先行研究は、1990年代半ば以降の「標準的キャリア」の変容を問題関心の端緒に置きながら、その議論の過程で見過ごされてきた「地方」の青年や、「ノンエリート」青年の問題に光をあてるべく、彼らにとっての「地元」という場やその機能について議論を展開してきた。しかしながらそれらの議論はまた「標準的キャリア」との対比において展開されることにより、必然的に「標準的キャリア」の価値基準を含みこみながら構成されざるをえない。それは、「地方」の青年に着目した研究が、「地方」を「都市」との対比の中に位置づけつつ、その中で生活する青年を先験的に「ノンエリート」青年として対象化している点や、その「ノンエリート」概念そのものが「標準的キャリア」との対比において規定されることによって、「ノンエリート」青年が生きる「地元」という場やその機能も、あくまで「標準的キャリア」との対比の中においてのみ独自性が見出されるという

限定的な解釈にならざるをえない点に見ることができる。そしてそのことはとりもなおさず、先行研究が意図するような従来の「標準的キャリア」とは異なる青年層にとっての「地元」という場におけるキャリア形成のあり方を考察する道筋をも、限定的なものにしてしまわざるをえないであろう。つまり、「地元」という場が「ノンエリート」青年にとって所与のものとして位置づけられることにより、杉田の言葉を借りれば、青年が「地元」という場を自身が生きる〈社会〉として構築していく回路を見出すことが、論理的には困難になるのである。本稿の知見は、先行研究の議論が抱えるこうした枠組みを析出した点にあるといえる。

それでは、先行研究はなぜこのような論理を取らざるをえないのであろうか。これを問うことによって、青年層にとっての「地元」をめぐる先行研究が持つ枠組みを乗り越え、より開かれたかたちで「地元」という場でのキャリア形成を考察することが可能になるであろう。紙幅の関係上、詳細に論じることはできないが、この点について最後に触れておきたい。

4.2 今後の展望：教育学研究のもつ「枠組み」へのアプローチの必要性

前節でも述べたように、青年層にとっての「地元」をめぐる先行研究がその本来の意図に反して議論を展開することが困難になるのは、これらの議論を構成する枠組みが「標準的キャリア」との対比においてのみ可能であるためであった。本稿では、先行研究がこのような論理をとらざるを得ない理由を、仮説的ではあるものの次の点に求めたい。

先に見たように、先行研究に残存する「標準的キャリア」の価値基準には、「学校から仕事へ」という間断なき移行の形態や、「地方から都市へ」という移動の自明性を背景とした「地方」でのキャリア形成への視点の「不在」、「離家」を達成することを「自立」と見なす自立観などが含まれていた。こうした価値基準を構成する一端には確かに、乾や本田が指摘するように、学校・企業・家庭という三つの領域の相互かつ緊密な連関がある。これらの議論は、戦後日本社会における青年層のある種の成長・発達モデルを提示してきたわけであるが、一方でまさにこのような成長・発達を遂げることそのものがなぜ「標準的」とされてきたのかという点についての検討までは踏み込むこと

ができていないように思われる。この点を考察することによって、「標準的キャリア」という価値基準を超えて、青年層の「地元」でのキャリア形成を考察する道筋を見出すことができるのではないだろうか。そしてそのためには、そうした成長・発達・発展という観念を構築してきた学校教育制度と、これを支えてきた教育学研究の有する枠組みを改めて検討しなおすことにまで視野を広げる必要があるのではないかと思われるのである。

例えば、戦後日本の学校教育においては、「標準語」としての「国語」が教えられることになるが、小熊英二の指摘によれば、そのような学校教育における「標準語」の使用によって展開された言語的統一は、一方で「地方」の「方言」の抑圧に結びついた側面があったものの、そこにはあくまで（主に経済的な）格差を是正しようとする意図があったという⁶²。つまり、学校教育制度を通じた「国家語」としての「標準語」の浸透が「中央」と「地方」との格差を是正するものとして理解されると同時に、「地方」は教育を通じて発展可能な場として捉えられていたといえる。

さらにこうした発展可能な場としての「地方」理解は、当時の教育学の議論にも見ることができ。元森絵里子は、1950年代初頭の教育学における「地方」への視点について言及しているが、そこで「地方」は「後進地域」として理解され、それゆえに教育を通じて教化されなければならない場であるという発想が主流であったことを指摘している⁶³。つまり当時の教育学においては、“「農村社会」を停滞的と断じて「文化国家」への転換に向けた生活の合理化を提案したり、「へき地」では子どもの性格や知能、栄養状態がどれほど悪いかを語って、地元の人に学校の必要性を力説したり”⁶⁴する論調がほとんどであり、“都市と地方の格差は、貧困や格差、不平等ではなく、「後進問題」だとされたのである”⁶⁵。ここで、学校教育はこのような後進性を乗り越えるある種の「希望」として位置づけられることになる。すなわち、“子ども期の学校教育が新しい（よりよい）社会を作り出すという教育的理想が語られ、「都市細民」や「へき地」の現実はやがて克服されるべきものとしてだけ扱われ”⁶⁶ようになり、そのような理想は、学校教育を受けた子どもたちが「大人」になるタイムラグの先に実現されるものとして理解されていたのである。このような理想が受容される過程において、“教育のみが人々に平等を与えてくれる、

学校のみが自らを貧困状態から引き上げてくれる”⁶⁷という、学校を通した「立身出世」の観念が人々の間に定着していくことになる。「立身出世」という意識は、“次の世代にはこんな生活をさせたくないのです”⁶⁸という人々の素朴な思いによって自己展開していくことで「学歴社会」を生み出すことになるが、それはまた他方で、選抜された「エリート」とそうでない「ノン」エリートの区分を生じさせることになる。

以上のような指摘を踏まえると、本稿で扱ってきた青年層にとっての「地元」をめぐる先行研究が今なお根強く有している議論の枠組みとしての「標準的キャリア」は、教育学研究が有してきた成長・発達・発展といった「枠組み」と多分に相関しているという仮説が導かれる。そのことはまた、先行研究が既述のような論理をとらざるをえない理由を、上記の「枠組み」へのアプローチの不在に求めることをも仮説的に導く。

本稿がこのような点にまで議論の射程を広げる必要性を提起するのは、青年層の「地元」という場にもとづいたキャリア形成のあり方を、単に現代的な社会状況における必要性という観点からのみ考察することを避ける意図があるためである。「標準的キャリア」の枠組みに基づいて「地元」でのキャリア形成を考察する限り、それは常に「標準的キャリア」との対比においてしか展開されえないが、「標準的キャリア」を存立せしめてきた教育学研究の持つ成長・発達・発展という枠組みにまで視野を広げることによって、「地元」との結びつきの中で対象化されてきた「地方」という場や「ノンエリート」青年を、そのような価値に沿わなかったがゆえの強みという観点から、言い換えれば、そうであるからこそ「標準的キャリア」の文脈に回収されない多様なキャリアを形成してきたものとして解釈しなおすことが可能になるのである。それはとりもなおさず、本稿で扱ってきた先行研究のいずれもが展望してきたことでもあった。このように考えれば、従来の「標準的キャリア」が変容したために「地元」でのキャリア形成の必要性を考察するのではなく、それ以前においても本来的には「ありうるはずであったもの」として「地元」でのキャリア形成を解釈することが可能になるのである。これは、青年層の「地元」でのキャリア形成を、「地方」や「ノンエリート」との結びつきから離れた普遍的なものとして考察することを意味する。

以上のことから、青年層の「地元」でのキャリア形成をより開かれたかたちで展開していくためには、「標準的キャリア」という価値基準そのものの相対化にとどまらず、これを存立可能なものとしてきたある種の成長・発達・発展モデルを付随する教育学研究の「枠組み」にまで議論の射程を広げて考察することが求められるのではないだろうか。

注

- ¹ 「地元」という概念を定義しようとする試みはすでになされているが、例えば吉川徹の議論にみられるように“地方としての周縁性 (rurality)”が「地元」概念に前提化されているものもしばしば見受けられる(吉川徹 “それぞれの地元の唯一の解” 〈荻谷剛彦編著『「地元」の文化力 地域の未来のつくりかた』河出ブックス, 2014) p. 15.)。本論は、このような「地元」概念の価値化のされ方自体を問題視するものであるから、ここでは「地元」を単に各人にとっての出身地という意味において用いることとする。
- ² 労働政策研究・研修機構 “若者の地域移動—長期的動向とマッチングの変化—” 『JILPT 資料シリーズ』 No. 162, 2015, p. 1-93.
- ³ 例えば、響田竜蔵 “過剰包摂される地元志向の若者たち 地方大学出身者の比較事例分析” 〈樋口明彦・上村泰裕、平塚真樹編著『若者問題と教育・雇用・社会保障：東アジアと周縁から考える』法政大学出版局, 2011) p. 183-211 など。
- ⁴ このような移行のあり方を支えていたのは、既述のとおり「日本型雇用体制」であったが、後藤道夫が指摘するように、現実として“日本型雇用で働く父親を軸とする家族の範囲にいる人々は、子どもを含めて、多く見積もっても、国民の半数をずっと下回る”ものであった点には注意が必要である(後藤道夫 『収縮する日本型〈大衆社会〉 経済グローバリズムと国民の分裂』旬報社, 2001, p. 5)。
- ⁵ 乾彰夫 『〈学校から仕事へ〉の変容と若者たち 個人化・アイデンティティ・コミュニティ』青木書店, 2010, p. 37.
- ⁶ このような移行のあり方が「制度的」に普及・定着したのは、1960年代前半といわれる(*Ibid.*)。
- ⁷ *Ibid.*, p. 44.
- ⁸ こうした家庭教育に対する視点に関しては、本田由紀 『家庭教育の隘路—子育てに脅迫される母親たち』勁草書房, 2008. や中西新太郎 『「問題」としての青少年—現代日本の“文化—社会”

- 構造』大月書店, 2012. などを参照。
- ⁹ 乾彰夫, *op. cit.*, 2010, p. 41–44.
- ¹⁰ 宮本みち子 “若者の自立に向けて家族を問い直す”〈阿部誠, 宮本みち子, 石井まこと編『地方に生きる若者たち インタビューからみえてくる仕事・結婚・暮らしの未来』旬報社, 2017) p. 58.
- ¹¹ これは先の乾による「戦後日本型青年期」という「標準的キャリア」のあり方を, 青年層のみならず当時の社会一般に当てはめているという点においてより広範なものであるが, その捉え方は多くの点で「標準的キャリア」と重なっているといえる。
- ¹² 本田由紀『社会を結びなおす 教育・仕事・家族の連携へ』岩波ブックレット, 2014, p. 19.
- ¹³ *Ibid.*, p. 20.
- ¹⁴ *Ibid.*
- ¹⁵ なお, 本稿では以上のような関心に基づきながら先行研究を扱うため, ここでは必ずしも各研究における主要な課題と知見をすべて踏襲するわけではない。本稿において扱う先行研究は, いずれも従来の移行研究に新たな地平をひらくものであり, その点においてそれらの知見は高く評価されるものであると考える。それにもかかわらず先行研究を上記のような関心から取りあげるのは, 後述するように, まさにそのような先行研究が展望するキャリア形成のあり方が, 先行研究自身の持つ枠組みによって困難になっているという自己矛盾の生起をそこに見るためである。
- ¹⁶ 尾川満宏 「地方の若者による労働世界の再構築 ―ローカルな社会状況の変容と労働経験の相互連関」『教育社会学研究』第 88 集, 2011, p. 252.
- ¹⁷ *Ibid.*
- ¹⁸ *Ibid.*, p. 255.
- ¹⁹ *Ibid.*, p. 251.
- ²⁰ *Ibid.*, p. 254.
- ²¹ *Ibid.*, p. 255–256.
- ²² *Ibid.*, p. 257.
- ²³ *Ibid.*, p. 267.
- ²⁴ 窪田玲奈 “地方都市における若年層の移行 (transition) 研究に関する考察枠組みの再検討” 日本教育社会学会研究大会発表資料, 2013, p. 4.
- ²⁵ *Ibid.*, p. 4.
- ²⁶ *Ibid.*, p. 1.
- ²⁷ *Ibid.*, p. 8.
- ²⁸ 山口恵子 “「東京」に出ざるをえない若者たち 地方の若者にとっての地元という空間”『現代思想』42 (6), 青土社, 2014, p. 224–236.
- ²⁹ このような「地元」理解は, 東北地方出身の若者たちの地域移動について検討した石黒らの研究にも見ることができる。そこで「地元」は, 不安定な生活を送る青年たちの「避難所」という表現によって表されている (石黒格他 『「東京」に出る若者たち―仕事・社会関係・地域間格差』ミネルヴァ書房, 2011)。
- ³⁰ 山口恵子, *op. cit.*, 2014, p. 233.
- ³¹ 窪田玲奈, *op. cit.*, 2013, p. 1.
- ³² 尾川満宏 “「地元」労働市場における若者たちの「大人への移行」―社会化過程としての離転職経験―」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第三部, 第 61 号, 2012, p. 58.
- ³³ 高山智樹 “「ノンエリート青年」という視角とその射程”〈中西新太郎・高山智樹編『ノンエリート青年の社会空間 働くこと, 生きること, 「大人になる」ということ』大月書店, 2009) p. 353.
- ³⁴ *Ibid.*, p. 388–399.
- ³⁵ *Ibid.*, p. 351.
- ³⁶ *Ibid.*, p. 368.
- ³⁷ 新谷周平 “ストリートダンスからフリーターへ ―進路選択のプロセスと下位文化の影響力―」『教育社会学研究』第 71 集, 2002, p. 151.
- ³⁸ *Ibid.*, p. 167.
- ³⁹ *Ibid.*
- なお, ここで「上昇移動＝地域移動」という図式が用いられていることは注目に値する。これは, 第 2 章で整理した「標準的キャリア」における「地方から都市への自明性」とも重なる図式である。
- ⁴⁰ 乾彰夫 “若者たちの移行に寄り添う”〈乾彰夫編『高卒 5 年 どう生き, これからどう生きるのか 若者たちが今〈大人になる〉とは』大月書店, 2013) p. 9–36.
- ⁴¹ 藤井 (南出) 吉祥 “ネットワーク形成・維持の基盤”〈乾, *Ibid.*〉 p. 217.
- ⁴² このとき「地元」は, ここでの研究対象が都市近郊であることから当然ではあるが, いわゆる「地方」と重ねられているわけではない。ここでは, 本稿の「地元」という語と同様に, 彼女たち自身が生まれ育った場所として「地元」が捉えられている。
- ⁴³ 藤井 (南出), *op. cit.*, 2013, p. 240.
- ⁴⁴ 杉田真衣 『高卒女性の 12 年 不安定な労働, ゆるやかなつながり』大月書店, 2015.
- ⁴⁵ *Ibid.*, p. 7–8.
- ⁴⁶ *Ibid.*, p. 203.

-
- 47 *Ibid.*, p. 204.
- 48 *Ibid.*, p. 227.
- 49 *Ibid.*, p. 228.
- 50 轡田竜蔵, *op. cit.*, 2011, p. 183.
- 51 *Ibid.*, p. 184.
- 52 *Ibid.*, p. 188.
- 53 *Ibid.*, p. 208.
- 54 *Ibid.*, p. 209.
- 55 *Ibid.*, p. 208.
- 56 *Ibid.*
- 57 御旅屋達 “居場所 個人と空間の現代的関係”
〈本田由紀編『現代社会論 社会学で探る私たちの生き方』有斐閣ストゥディア, 2015〉 p. 147.
- 58 *Ibid.*, p. 148.
- 59 *Ibid.*
- 60 *Ibid.*, p. 149.
- 61 *Ibid.*, p. 149–150.
- 62 小熊英二 『単一民族神話の起源 〈日本人〉の自画像の系譜』新曜社, 1999.
- 63 元森絵里子 “大人が語る「貧困」と「子ども」”
〈相澤真一ほか『子どもと貧困の戦後史』青弓社, 2016〉 p. 133–162.
- 64 *Ibid.*, p. 143
- 65 *Ibid.*
- 66 *Ibid.*, p. 144.
- 67 牧野篤 『〈わたし〉の再構築と社会・生涯教育 グローバル化・少子高齢社会そして大学』大学教育出版, 2005, p. 41.
- 68 上原専祿・宗像誠也 『日本人の創造』東洋書館, 1952, p. 194.

Study on the Research Framework of “Home Town” for Adolescents: Focusing on “Standard Career”

Keita TANDA[†]

[†]Graduate School of Education, the University of Tokyo

The purpose of this study is to review the precedent studies on “Home Town” for adolescents and to examine their theoretical framework. The transformation of the transition “From School to Work” since the mid-1990s has greatly changed the working style of young people and their lives. Under such circumstances, young people are now aiming to remain or return to their “Home Town”. The previous studies, based on the place called “Home Town”, have been considering the new way of their career formation as an alternative to the “Standard Career” before the mid-1990s. However, these attempts will be difficult, since the previous studies have framed “Home Town” with the following concepts: “Rural” and “Non-Elite” based on the value of previous career formation, called “Standard Career”. In order to consider the new career formation on the basis of the “Home Town”, the framework used in the previous studies needs to be reexamined.

Keywords: Adolescents, Home Town, “Standard Career”, Career Formation